慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 陳衡哲と『西洋史』：「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば：その2 陳衡哲(3) |
| Sub Title | Chen Henzhe's history of the west |
| Author | 櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2014 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.7 (2014. ) ,p.91(164)- 134(121) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20140331-0134 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 陳衡哲と『西洋史』：「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば
## ――その 2　陳衡哲（3）

櫻庭ゆみ子

## 1　はじめに

> 歴史の時代区分は、昼夜の区分のようである。正午は確かに昼であり、真夜中は確かに夜であるが、黄昏時のほの暗さ、暁の淡い光の中では、何分までが夜で何分からが日中なのか誰も確定できない。けれどもそのぼんやりとしたほの暗い空こそが、昼夜を分かつ明確な境界ではないか。（陳衡哲『西洋史』「導言」(1)）

胡適とともに白話運動を推進した陳衡哲とその夫任鴻雋（1886-1961）はしかし、最期まで旧詩を手放さなかった、と前稿の最後で述べた(2)。陳衡哲が、夫任鴻雋の死に際して深い悲しみの情をあらわしたその言葉も旧詩だった。理念と実践が乖離したかに見えるこういった姿勢は、詩や詞に心情を託して表現するのが中国文人の伝統をひくあり方だったことを思えば奇異なことではない。1920年代は言葉の伝達様式及び思惟形態が急速に変化した時代である。その中にあって、伝統的文人として矜恃を保ちながら「口語体」の方向に棹さす動きを自ら担った二人は伝統と近代（モダン）、東と西の文化様式の融合には慎重に臨んでいたように見える。文化の継承の一つの型を示す二人の姿勢を、新旧の交錯する「五四」の知識人によくある言行不一致の一つのパタ

ーンと位置づけてこと足れりとするならば、渾沌とした状態に見える時期こそが実は文学研究に豊かな土壌を提供することに気づかぬ恐れがある。

文学の分野では1918年に発表された魯迅の『狂人日記』を中国の近代的文学の始まりと位置づけるのが一般的だが、この「近代文学」の起源を絶対視すれば、変化の過程にあった／ある可能性を見逃し、変化の過程を展開してみせることに意味のある文学研究はいずれは行き詰まっていくだろう。

文学は言葉の芸術である。そして言葉によって構成された「作品」は、様々な要因で変化する言語の多様な変化の一点である。ひとつの突出したテクストを取り上げる場合でも、言葉を変化せしめる時間の連続性と他領域との関係性を見なければ、テクストを構成する幾重にも重なる層のダイナミックな動きは見えないということだ。

こう述べるのも、昨年刊行されて話題となった『中国現代文学編年史』[3]で、陳衡哲の唯一の小説集『小雨点』[4]に収められた「一日」が「狂人日記」との近代白話小説一番競争の文脈で紹介され、且つ、文学史の視点からみて陳の他の小説は重要ではないと論断されているのを目にしたからである。この編年史の、従来とは違った面から文学史を再構築するという果敢な意図は理解できるが、「一日」の扱いに関しては、テクストの層を見ないという点で、従来の枠組みを出ず、これでは対象の全体像は見えてこないだろう。

「一日」は、以前論じたように、米国ヴァッサー女子大での一日の会話を素描したものであり、陳がその後自らの文体を獲得していく過程の一段階を示すものである[5]。中国近代小説史上の最初の「白話文体」小説であれば、これに先立つ李劼人の『遊園会』や劉韵琴『大公子』がすでに論議にあがっているように[6]、「一日」が「最初」ではない。また、「白話体」が歴史的に様々な変化を経て「五四」期の文体となり、それがまたいわゆる「現代中国語の文体」へと変容してきたその過程に注目すれば[7]近代白話として「狂人日記」と「一日」の

どちらが先かという議論そのものに意味がない。

陳衡哲の作品は、上記の編年史で言及された小説だけではない。彼女は西洋史の教授として歴史の教科書を編集し、いくつかの歴史小品を書き、そして英文で自伝[8]を書いている。彼女の真骨頂は実はこういった「他分野領域にまたがる」作品群にある。私が試みたいのは、それら、いわば歴史と文学、或いは教育領域との境界にまたがるテクストに注目し、そこで使われる言葉の系譜にもう少し注意してみること、文学の専門領域から少し逸脱してみること、そして様々なテクストを鳥瞰する視点から捉えてみることである[9]。陳衡哲でいえば、彼女が白話文体の試みを行う中で獲得した彼女自身に最も適した表現の特徴、その問題点、方向性等を近代化の諸々の動きの中で見直してみること、である。

そういった媒介としての言葉の有り様をできる限り偏りなく提示することで、ある時代、ある地域への再認識をうながす。これが今日閉塞感のある文学研究のなし得る貢献ではないか。

隣り合った学問領域を横断し、時間軸に沿って変化の様相をみる、そして近代のダイナミックな流れをつかむ、というのは容易なことではない。それでも、作家、研究者、政治家、教育者等々、複数の身分を兼ねていた「五四期」の作家たちを見るときは、特に、折り重なって構成される各テクストを見ることは必要である。その重要性を、高校生向け西洋史の教科書として編集された中国人による初の白話体『西洋史』[10]は教えてくれる。

今回は、陳衡哲のテクストとして真骨頂と言われるこの『西洋史』を取り上げ紹介しながら、そこでの問題点と課題を挙げ、文学研究の可能性を探っていきたいと思う。

## 2　陳衡哲の『西洋史』

陳衡哲の名は、五四時期の作家として何度か文学史上に現れるが、日本における紹介はまだ少ない[11]。前稿からも時間が経っているので、ここでもう一度彼女の略歴を確認しておこう。

陳衡哲（1897年７月12日-1976年１月７日）、江蘇省常州武進人。筆名は莎菲、Sophia H. Z. Chen。両親や伯父のもとで古典を学び、のち上海女子中西医学堂[12]で３年ほど英語を学ぶ。1914年、第一回義和団事変賠償金女子奨学生として渡米、ヴァッサー女子大で学士号を、シカゴ大学で修士号を取得。専攻は西洋史、副専攻として欧米文学を学ぶ。1920年９月、北京大学学長の蔡元培（1868-1940）の要請に応え、北京大学初の女性教授として西洋史の教授に就任。同年、先にアメリカより帰国していた任鴻雋と結婚。1921年に北京大学の職を辞し、子育てをしながら『西洋史』他歴史の教科書を執筆。その後南京の東南大学で半年ほど教え、1930年に再び北大に戻り、１年ほど教える。この間、『西洋史』上下、『文芸復興小史』等の教科書、短編小説集『小雨点』、『衡哲散文集』、英文著作３、４冊等を刊行。また1927年から1933年にかけて計４回太平洋学会に中国代表として出席し[13]、また任鴻雋、胡適等と『努力週刊』、『独立評論』を創刊し、時事関係のエッセイを多数執筆。日中戦争勃発以降は、香港、四川、雲南等各地を転々としながら、中国語及び英語でエッセイを執筆、発表。1949年以降、任鴻雋とともに上海にとどまり、上海市政治協商委員会委員に任命されるが、体調不良を理由に社会活動から距離を置く。1961年、夫任鴻雋が亡くなる。晩年は視力をほぼ失い、1976年に死去。享年86歳。1998年『西洋史』の復刻、2006年『陳衡哲早年自伝』[14]、2007年『任鴻雋陳衡哲家書』[15]の刊行など、近年再評価の動きが始まっている[16]。

さてこの『西洋史』だが、以前の論述でも取り上げたように、1987年に遼寧教育出版社から再版された際、当時北京大学の教授だった陳平原が胡適と任鴻雋、陳衡哲三人の信頼で結ばれた関係について紹介しながら陳衡哲の『西洋史』についても言及し[17]、「80年を経た今でもその魅力は失せない」と高く評価している。

『西洋史』は、1921年に北京大学の教授の職を辞した陳衡哲が、当時商務印書館編集部で新教育制度に適した教科書の編纂に力を入れていた王雲五[18]の要請に応え、高校の西洋史の教科書として執筆したものである。上冊が1924年に、下冊が1926年に刊行され、上冊は初版の数ヶ月後に加筆修正がなされ、3年を待たずして6刷りされている[19]。陳は同時期これとは別に『文藝復興史』を執筆しているが、これらのテキストは当時特に若い学生達に広く読まれた[20]。

『西洋史』の下冊が出たときに、陳衡哲の親しい友人でもあった胡適は、「創意のある野心的な著作」(“一部帯有創作的野心的著作”)であり、「西洋史を治めた学者が中国の読者のために誠意を込めて著した最初の『西洋史』である。この点から言えば、本書は嚆矢となる作品である」[21]と、やや褒めすぎの嫌いのある書評を書いているが、確かに胡適が言うように、叙述と解釈によく工夫が施されている教科書ではある。

陳平原も上述の論評で「『嚆矢とすべき』とか『最初の』といった点からの価値はすでになくなっている今、当時はよく読まれた高校の教科書が、今日でも読むに耐えるだろうか、答えは耐えうる(“还能读”)」「面白い(“诱人阅读，品味”)」と述べている。

この「面白い」(“可読性”)については、米国コロンビア大学から帰国し、当時天津の南開大学で西洋史等を教えていた蔣廷黻(しょうていふつ)[22]も「陳衡哲の西洋史を評す」と題した書評[23]で、読んだ後の痛快感を伝えたくて本書を取り上げた、と述べ、高校の教員に読んで貰いたいと推賞している。

蒋廷黻が『西洋史』を評価する点は、生き生きとした表現の妙、知識に裏打ちされた[24]言葉の運用能力の高さだが、例えば、それは、西ローマ帝国が滅んだくだりを「476年になるとゲルマンの一人の首領、オドアケルが、長い間外部の傀儡であったローマ―皇帝ロロムルスをそっと皇帝の地位から押しだして自らローマの主人となった。西ローマ帝国の身体は、ここに至って、とうの昔に滅んでいたその魂の後に従い、昇天とあいなったのである！」[25]といった表現で、「興味を抱かせつつ真理を悟らせる」[26]が成功している点である。蒋廷黻は「この数行で、西ローマ帝国滅亡の事実と精神を完璧に描き出している。この効率の良さは、普通の教科書の数十頁に勝る」とプラスの評価を与えている[27]。

もっとも、胡適が高い評価を与えた叙述と解釈については、例えば「ギリシャ人の芸術的天分とローマ人の政治的天分といった天分なるものに寄りかかりすぎている」、と歴史学の立場から「史」と「文」の関係に係わる批判もしている[28]。

言うまでもなく、事実関係を正確に把握することは歴史研究の基本であるから、陳が得意とする寓話の使用や、想像を膨らませて歴史物語風に描くことは学問とはみなし難いとするのは当然であるかもしれない。ただ、記述に使う「言葉」そのものは解釈の多義性を含まざるを得ない存在である。細かく「証拠」を積み上げていき「事実」にいたる道を築く歴史家も、その時々で取捨選択をしている。一方、文学の中でも現実になるべく近い情況、人物の再現、つまりリアリズムを目指す書き手は、出来るだけ細かい「事実」に目を配り、対象を組み立てていく。両者は時には似たような作業を行う。「事実―真実」を単純にそれぞれ歴史領域、文学領域にと分担させることは出来ない。ことはもっと複雑である。いずれにしろ、真実に如何に迫るかという点で文学―歴史の両分野からのアプローチが評価される今日、読み手をその「現場」に誘う『西洋史』のストーリー性が再評価されていることは注目すべきだろう。

最近では、北京大学で国際関係を教えていた陳楽民が、陳衡哲の「筆法」を「文」と「史」が融合した伝統的なありかた「史中有文、文中有史」(史の中に文が有り、文の中に史が有る)」をひくものとして、『西洋史』の中で随所に見られる旧詩の引用による達意の妙を絶賛し、学部の「欧州近代史」では学生にまずこの『西洋史』を読ませていると述べている(29)。中国の教育界ではまた、事項の羅列と暗記の強制によって若い世代に歴史離れの傾向が起きていることに危機感を抱く教師や研究者から陳衡哲の『西洋史』へ支持の声が聞かれるがこれも、『世界史』の「可読性」の高さを示すものと言えるだろう(30)。

ストーリー性を持たせて歴史を語ることの是非はひとまずおき、まずはこれほど評価される『西洋史』について、その描写の特徴をもう少し具体的に見てみよう。

例えばハンムラビ法典で有名なハンムラビ王についてであるが、『西洋史』では上古史の章で紀元前2200年にセム系民族がバビロンを占拠し、その首領がハンムラビであるとした後で、その功績は人々への関わり方と法令の制定にあるとし、残された公式書簡から知れる人物像としてハンムラビを次のように描く。

> 五十七通のハムラビの公式書簡は、彼が偉大な政治家であるだけでなく、その性格と才能を我々に教えてくれる。それを読むと、この君主の多忙ぶりが見て取れる。堤防が決壊すれば長官を修理に派遣し、暦法が乱れれば改正の命を下す。不公平な判断がされたとみるやそれを糾し、牛や羊の繁殖の知らせには祝賀の詞を送る。官吏の汚職には彼らが法の網を逃れぬよう策を講じる。ともかく、四方に耳をそばだたせ、四方に視線を張り巡らせ、口からは絶えず命令を下し、胸の内では常に治国富民の事業に思いをめぐらせていたのである。実に古代の賢君と称されるに値する。(第一編「上古史」第三章「西亜古文化」)

簡潔ではあるが、二千年ほど前の人間を当時の具体的な生活に即して描き出す記述は、少なくとも日本の西洋史の教科書には見られない。こういった表現の妙は『西洋史』と同時代の教科書でも珍しかったようである。陳と同じく、1930年代から40年代にかけて広く使われることになる西洋史の教科書編纂に心血を注いだ人物に何炳松がいるが[31]、何は、こういった陳の叙述の特徴をつかみ、それを高く評価している。

## 3　何炳松の紹介

何炳松は、陳衡哲の同僚でもある。この篤実な学者は、1924年１月に陳衡哲の『西洋史』が出版されるとすぐ詳細な書評を発表する[32]。

何炳松は、当時、彼がアメリカで学んだ新史学の概念を、蔡元培による改組後の北京大学の西洋史の授業で実践していたが、彼によるこの紹介は、歴史教育について自分とほぼ同じ考えのもとに編まれた高校用西洋史教科書の価値を世に問う趣旨になっている。何炳松はまず、中国においてまだ歴史の浅い西洋史研究について概略を述べ、その中で刊行された『西洋史』の意義と価値を紹介する。実直な歴史学者が歴史教育の現場に立って発信した丁寧で好意的な紹介である。

1920年代は、1919年にジョン・デューイ（1859–1952）、ポール・モンロー（1869–1947）らの訪中をきっかけに教育理論、制度を従来の日本式からアメリカ式へとシフトさせつつあった教育界過渡期の時期である[33]。歴史教育については、民国政府成立以前から日本に亡命した梁啓超や日本留学生らによる「新史学」が提唱され、主に日本語からの編訳を通じた受容がなされていた[34]。1917年には北京大学に史学系が設立される等、近代的な教育制度の確立に向けての動きはあった[35]。しかし、教科書や授業内容、成果、影響等、具体的な状況についてはそれほど研究は進んでいないようである。そういった中でこの書評は、1920年代の中国史学界の状況及びアメリカ経由の「新史

学」との関係が伺い知れる点で『西洋史』の背景の理解の助けとなると思われるので、以下重要と思われるところをまとめながら内容を紹介しておこうと思う。

何炳松は、まず、1920年代当時まで、中国における外国紹介はかなり限定されたもので、西洋に関する著作も、同時期の日本と比べると「恥ずべきほど少ない」としたうえで、従来の西洋紹介の著作を具体的に挙げそれらの問題点を指摘する。何によると中国人によって書かれた最初の西洋史は明の萬暦年間に張燮（1572–1640）による『東西洋考』六巻（1617年刊行）である。ただしそこでいう西洋とは実際には南洋のことで、鄭和の西洋派遣（“出使西洋”）を記した『瀛涯勝覽』（1614年）でも、西洋とは今のインド洋を指したという。また明末清初の西欧の宣教師による多数の著作は、歴史に言及したものが少なく、宗教宣伝の性質が色濃かった。しかも、ヨーロッパという概念が皆無だった中国人が理解しやすいように中国人の好みに合わせて余計な記述が加えられていたという。明の天啓年間にイタリア人艾儒略（Giulio Aleni 1582–1649）の著した『職方外紀』（1623年成立）や清の順治年間にイタリア人利類思（Luigi Buglio 1606–1682）ら三人による『西方要紀』がその顕著な例である。そして清末になると西洋史の記述は増えるが良書は少ない、と述べたところで以下のように類別し批判していく。

まず、西洋史と称しながら、実際はあちこちから切り貼りしたものがあるとし、それらは誤った記述が多く、読んでも意味が通じないと断罪する。

何炳松はこういった書物の流布に腹を据えかねたのか、憤った口吻で「出典も示さずでっち上げに等しい。欧米諸国語（“西文”）も日本語（“東文”）すらよくわからない輩が「西洋史」を著すとはなんという奇怪なことか！」（“這類書往往不說明它的來歷，是在同假造的差不多．著作者既不諳西文，甚至連東文亦不十分精熟，就著起西洋史來，

豈不奇怪!“）と手厳しい。

次に日本語“東文”から訳出したもの[36]や、英文やフランス語から日本語経由で中国語に訳したものがあるとし、これらに対しては「同じ文字ですら書き写しや抜粋は誤訳の危険があるのだから、２、３種類の違った文字を次々に転売するのはもちろん最も危険なことだ」「隔靴掻痒、間違いが更に間違って伝達される危険が大きい」（“隔靴搔痒，以訛傳訛，斷難倖免”）と批判する。

そして外国の宣教師や中国人の信者が西洋の原文を直訳したものはそれなりに読めるが、訳者が中国風の表現にしたがる傾向が強すぎるとする。ただし、当時一定範囲で読まれていたらしい『邁爾通史』[37]については各地の思想文化の比較にすぐれているが、内容の古さは否めないと述べている。

中国人による著作としては、先輩格にあたる同僚の梁啓超（1873-1929）「イタリア建国三傑」[38]、康有為（1858-1927）の「フランス革命」[39]、蒋百里（1882-1938）の「欧州文藝復興」[40]を挙げ、これらに対しては「良く書けている」と敬意を表しつつも、「一つのテーマに限られ、古代から現代までの通史になっていない」とその不足を指摘する。

このように従来の教科書の不備を列挙し、最後に「著名な中国人学者の中にも、ハンガリー人を匈奴の末裔としたり」「ホメロスを西洋史学の始祖とする者もいる」と同業者の認識の遅れをやんわり批判したうえで、陳衡哲の『西洋史』の意義を述べる。

> 本書は高校の普通の教科書にすぎないが、しかし、これは中国において最初の、西洋史を専門に研究する学者による書物である。しかもその内容は斬新で今日の史学の思想の潮流に合致するものである。」（“這本書雖然不過一本普通中學的教科書，他是第一部中國專門研究西洋史的學者的創作。而且他的内容很新穎很合現代史學思想的潮流”）

ここで何炳松がいう「今日の史学の思想の潮流」とは、20世紀初頭、米国でJ. H. ロビンソン(41)等が推し広めた「新史学」(42)を指す。

従来米国では歴史の記述は傑出した人物の伝記が政治的軍事的な出来事に主眼が置かれていたが、「新史学」では記述の対象を文化、社会一般に広げ、より総合的に歴史の流れをとらえようとする。1912年より4年間米国で政治、経済、歴史等を学んだ何炳松は、このロビンソンの影響を強く受けている。陳衡哲は『西洋史』「導言」で以下のように述べているが、何は、陳のこういった姿勢を、歴史的事実の要因となる影響（原文“背景”）とを重視する「新史学」のあり方と同じであるとするのである。

> 研究すべきは、皇帝なにがしの家譜ではなく、軍人や政客の言動でもなく、私たち人類がいかにして生肉を食べる両足動物から現代の文明を代表する人に変ったかである。こういった人を研究するためには、その思想行為と関連する重要の事物を研究しないわけにはいかず、それゆえ、政治、工業、農業、文学、美術、科学、哲学及びあらゆる助けとなるもの、或いは人の前進を妨げるような様々な影響（“背景”）を研究しないわけにはいかない。こういった影響を研究すべきであるだけでなく、その原因と効果を理解しなければならない。これが歴史を研究する目的である。(「導言一　歴史研究の目的」)

また中国の歴史書が多く「盤古開闢以来」といった神話で人類史を始めるのにたいし、陳衡哲は初めて地史学、生物学の研究成果を入れて地球や生物の始まりとともに人類の歴史を語る科学的な態度をとっていると研究姿勢に賛意を示し、論述方法にしても地球の始まりを、当時議論があった星団凝固説と星霧説のどちらかに結論づけず現象を紹介するにとどめるというように慎重な姿勢があるとして評価する。

そして何炳松が重要なポイントと考える進化論については、陳の「それ（古代史）が始まった時、ヨーロッパの白人がまだ生肉を食ら

いその血をすすっていた時代、及びその時代が完結したとき、現代の文化のあらゆる種子はほぼすべて地に播かれ、一部はまだ地中にあり、一部はすでに萌芽し、一部はすでにつぼみを開き葉を広げ華麗に咲き誇っている」[43]や、「人類の文明の花は依然として止まることなく開き続ける」[44]といった表現を引いて文化は先の文化を継承しつつ続くというのは進化論に裏打ちされていると評価する。そして歴史上の人間を、神聖な帝王という高みから生物学的な動物の位置に下げて記述する陳衡哲の姿勢を擁護している[45]。

「新史学」が重要視するものとして何は、先にあげた「様々な背景の影響」や進化論の概念の他に、もうひとつ、文化史の概念をあげている。そして、陳の「歴史は断片ではなく総体であり、歴史の材料を選択する基準は、単に政治だけではなく、経済や宗教だけでもなく、政治、経済、宗教、そして人類のあらゆる活動の総和であるべきことを確信する」[46]という言葉を引き、彼女が明確に文化史の路線をとっているとする。何は、『西洋史』出版の前年に中等教育の大家が、文化史は個別の文人や芸術家を取り上げるだけだから今の時代の文化を表現できない、という批判をしていたことを挙げ、それへの反証として『西洋史』の具体的な箇所をあげ、それらを読めば、反論はできないはずだとしている。

この他『西洋史』がイスラム文化を重視していることに対して「西洋史をヨーロッパ人の視点に偏らせない、快挙だ」と述べている。もっとも陳衡哲がシカゴ大に提出した修士論文が古代の東西文化交流を扱っていることを考えれば、この視点が突然でてきたものではないことはわかる。

もちろん、何はプラス面だけではなく、章立ての不均衡、バランスの悪さを指摘することも忘れず、版の時に調整することを提言しており、これが六版以降の修訂版に反映されたようである。

『申報』の紙面一枚半にわたる長い書評の最後に何は文体に言及してこう結論づけている。

「陳衡哲女史の本書は、あちこちから切り貼りされた代物ではない。誠心誠意を込めて構築された創作である。この書を読めば、陳女史の眼光が、歴史の上面にあること、歴史に取り囲まれてあちこち逃げ回ろうとしても逃れられないというのではないと感じる。言い換えれば、陳衡哲女史は西洋史を深く研究しており、しかもなめらかに流れる筆を手にしており、それにより、西洋史の奴隷になるのではなく、それを御することができる。要するに、西洋史を編集するのに完全なる資格があるのである。」(47)

以上、従来あまりとりあげられてない教科書の書評ということもあって少し詳しく何炳松の言葉を紹介したが、注意したいのは自己の著述にはいたって禁欲的な学者肌の何炳松がやや羨ましげに評価するのが、やはり陳の叙述の「可読性」だったことである。陳衡哲が同時期に著したダンテ、ペトラルカの小伝や後の「キュリー夫人」「アダム女史」等の歴史上の人物小伝にもそれは通じるのだが、語りかけるような口調と共に、巧みな比喩や寓話の用法が歴史的人物や出来事のイメージ再現に功を奏している。何が評価するように、陳はまさに歴史に振り回されるのではなく逆に手綱を握ってしっかりと歴史を御している感がある。

その例をもう一つ出してみよう。例えば、北米の苛酷の植民地争奪戦をまとめる際、植民地争いの結果の一つとして帝国主義が勃興したとして、次のようなまるで動画を展開するような比喩を使って表現する。

> 国際間の猜疑と競争はもともとヨーロッパ列国が成立した後の普遍的な現象であったが、この時［新大陸が発見されたときを指す］、こういった犬の群れに、突如として空からよく肥えた肉の巨大な塊が投げ入れられたのである。忽ち興奮の渦がわきおこり、雄叫びがあがって大混乱が生じる。こうなれば殺し合いの度合いはますます激しくなら

ざるを得ない。それぞれが肥えた肉を独り占めにしようと欲したからである。このようにして私たちがよく耳にする帝国主義が興ったのである。その［帝国主義を指す］やり口（“工具”）とは陰に陽に略奪すること、いわゆる植民地戦争であり、その犠牲がその肉の塊、すなわち、私たち中国も含む、世界のその他の国々である。（第三編近世史第五章「地理上的大発見及植民地的競争」）

陳衡哲は、イメージを喚起し、感性的思惟とでもいうべきものに訴えかけることが真実を悟らせる有効な手段であることとして積極的に語りに取り入れているのである。それは中国伝統絵画を深く探求した母親のもとでの原体験、ヴァッサー大でアメリカ人に『詩経』の世界を口頭と文字で紹介した経験、または演説大会での比喩の効用等から体得したと考えられる。北京大学の職を辞して『西洋史』の執筆に専念した時期は、彼女が小説、散文、批評、詩、或いは時評といった様々なジャンルで「白話体」の試みを行っていた時期と重なる。彼女は先に言及したように２年間をかけて『西洋史』の上冊をまず完成させ、その修訂を行いつつ半年後に下冊、更にこれまたよく読まれることになる『文藝復興史』を刊行する。非常に多産な数年間である。比喩を用いて分かり易く対象を形象化し、読み手の理解と興味を誘う語りかけのスタイルは『西洋史』の執筆とともに次第に形作られていき、夫任鴻雋と共に啓蒙に力を注ぐことになるその後の言語活動を支える基本的なスタイルとなっていったと見ることが出来る。

## 4　文学と歴史

ところで陳衡哲は改訂前からの「序」で次のように述べている。

私の教科書編集の目標は、真理と興味を同時に読者の心に生じさせることである。私は活きた歴史を埃に埋もれさせて死なせることなどと

> てもできないし、ましてや幻想の神が歴史をその支配領域に引きずり込み従順なる奴隷にするのをみすみす見ているつもりもない。もしかするとこのことにより、多くの歴史の専門家や文学の専門家に顔を合わせられなくなる［彼らの機嫌を損ねるの意］かも知れないが、それでも若い人々（“少年姐妹兄弟 men”）の歴史への興味を少しでも引き出すことができ、歴史の真の意義を理解する助けとなるならば私の目的は達せられる。

厳密な実証を期す歴史の側からも、レトリックを重んじる文学の側からも批難されるべき境界の侵犯を行っていることに彼女は十分自覚的だったのである。「文」と「史」の二つの領域に相互に乗り入れている訳である。双方の分野でともに面白くてためになることは必要なのである。けれども「史」の分野では自分の言い分が完璧だとは言わない。多くの叙述箇所で、読み手が自分で考えて判断できるように、或いは自分で史料を探る手がかりを提供するという語りかけをしている。わかりやすさを目指しての比喩の多用は、また逆説的に解釈の多様性を許すものである。言葉の効果から見ると、読みの可能性を広げる性格を持つ。開かれたテクストが目指されているとも言える。

彼女が歴史の教科書を著す目的、主張ははっきりしている。『努力週報増刊』で刊行間近だった自著の『西洋史』について述べているがそこでは、まず著述の目的として「戦争が文化に反するものであることを示すため」をあげ、「軍人や政治家が、人々を愚弄する黒幕であることをあきらかにして、戦争は避けうるものであることを知らしめること」が著述の目的だと明言している。それから「まず歴史的事項の背景を説明し、そしてその因果関係及び相互の影響関係をあきらかにすること」に重点があることとし、次のように言葉を続ける。「それによって現代社会の各現象を分析する能力を高めてもらうのである。某国の某人物が何年にどの地域を征服したか云々を事細かく調べるだ

けで因果関係を探らないのならば何の意味があるのか。だから、帳簿の記載事項のように事実を列挙したり、儀式張って戦果を誉め称えたりするようなことは一切行っていない。人名地名も、本書では極力少なくし、学生の脳を無駄に使わせないように編集した」[48]と。

因果関係を探るために、敢えて細部にはこだわらない、この態度は、客観性の名のもとに大量の名詞と事項が目白押しになった歴史教科書に慣れた目にはかなり大胆にうつる。しかし、当時の限られた環境で入手できる限りの史料を読み込み[49]、はっきりした目的のもとに事項を取捨選択している様を見るとき、手の内を明かしてみせる姿勢は誠実であると感じる。そして話の展開は確かに非常に分かり易い。「公平な視線で、自分の言葉を用い、西洋史の史実を新たに叙述してみせる。作者の努力は少なくとも、西洋史の研究に於いて、歴史の想像力と文学の才能を運用して創作することによる貢献がゆるされるのだということをわからせてくれる」[50]という胡適の評価は頷ける。

戦争の愚かしさを知らしめ避けるために文化的な貢献をするというのは、国内が混乱状態にあった1927年という当時の時代性を帯びている。今現在の問題点からはじめて過去の問題へとその原因を探るというのもまた「新史学」の基本的姿勢であるが、『西洋史』では、国内外の紛糾に国の存在そのものが危ぶまれるという危機感が、西洋という「彼の地」の過去の出来事を説明するにしても常に目下の自国の情勢と関連づけられ、それが活きた歴史の中に身を置いているという臨場感を読むものに与えることも確かである。

陳衡哲の場合、目前の矛盾の多くは自分自身の問題から発する女性の問題と中国という国を構成する次期世代の青少年の問題である。『西洋史』上冊が刊行された1924年１月以降、胡適との関係で時々取り上げられる短編小説「ルチスの問題」を含め、創作にしろ論評にしろ、啓蒙の色彩を帯びた散文体が数多く発表される。そこには、人間の普遍性への確信を基礎にした上での「個」の様相を著そうとする歴史家としての視線が常にある。それらはいわゆる理性の勝った「客観

的」な表現となっている。作家の創作はこういった視線を持っているという姿勢の全体から見る必要がある。陳衡哲はまずは理性の人なのである(51)。

## 5　歴史教育

彼女は『西洋史』の冒頭で「歴史とは人類全体の伝記である」(“歴史是人類全体的伝記”)と宣言しているように、陳衡哲の関心は常に人間にあり、その営みとしての文化こそが歴史の流れを作るものとしてこれを重視する。

そしてまた、彼女は教授職にある教育者でもある。教育の場は教室であったり自宅であったりしたようだが、常に学生への教育的配慮を欠かさなかった。そこでの姿勢は、彼女が尊敬し、また実際その語りから多大な影響を受けた梁啓超(52)とも、同じ西洋史研究仲間の何炳松とも、一番の親友胡適とも異なる彼女独自の特質を示すものであるように感じる。

陳は「序」でまた次のようにも言っている。

> この本のできは私の満足からほど遠い。例えば戦争が文化に反するものだということについても、この主張を満足させうる釈明をするために十分な史料を集める時間があっただろうか。この不満は他日『西洋文学史』を編纂したときに補うしかない。
>
> ただ教科書は教師を除外したら、白紙に黒字の死んだ書物となってしまう。この教科書を採用した教師の方々に、私の編集の意図を汲み取り、精神的な支持を与えていただきたいと思う。教師の方々が若い人々を助けて、国際的な観点から物事をとらえられるようにしてくれれば、人類の誤解の機会を減らすことができ、人類の理解と共感も日ごとに増していけるだろう。この大きな責任については、歴史の書き手は１％しか貢献できず、残りの99％はいずれも青年を導く教師の肩

に掛かっている。今十二分の熱意と希望でこの教科書を私たちの学界の案内人に捧げたいと思う[53]。

自分で問題を探り解決法を見つける（なにやら昨今の大学教育の現場でよく耳にする言であるが）という教育方法は陳衡哲のヴァッサー大での体験に基づくものである[54]。教育の現場での教える側教わる側それぞれの個性にあったメソッドの許容は、彼女が理想とする教育として譲れない一点のようである。

先に言及した蒋廷黻は、陳衡哲について、「新史学」の立場が鮮明だとする[55]。「新史学」派はもちろん、梁啓超を筆頭とする日本「留学」及び何炳松らの米国留学帰りの研究者が中心となっており、蔡元培が断行した学制改革の流れの中で近代的な歴史教育を推進する、当時としては最も力のある教育集団だったといえる。けれどもこの一員として新しい潮流に乗ったかに見える陳衡哲と任鴻雋だが、二人の教育界における立場は微妙である。

1922年７月３日、済南で中華教育改進社主催の歴史教育組及び地理教学組会議が開かれ、会議に先立つ数ヶ月前に専門家が求めに応じて史学地理学の教育に関する提案が為された。７月３日の会議には５つの議案として提案されたうちの一つが陳衡哲と任鴻雋によるもの（陳衡哲提議、任鴻雋付議）で、提案は「中等教育以上の学校では歴史の授業の際に講義案（教科書及びそれに代わる要綱））をやめる」というものだった。会議録によると、参加者は梁啓超、徐則陵（1896–1972）、柳貽徵（1880–1956）の４名のメンバーと聴講者６名で、討論の結果陳衡哲の提案が否決された。会議のメンバーと陳、任は教育方針に於いて、「個」をどう教育するかという根本の部分で食い違いがあるように思える[56]。陳衡哲は前年の暮れに北京大学の職を辞し、任鴻雋は年明け２月に教育部教育司長の職を辞している[57]。彼女が発足したばかりの北京大学歴史系の栄えある教授職の地位を辞したの

は、胡適が日記で残念がったように、子供が出来たためとばかりはいえないようである。「個」を重んじるあり方は、国民国家建設に向けて「個」よりは全体の均一性を重視する梁啓超らの教育方針と相容れず、そういった情況で自分の教育方針を貫くことの限界を感じていたのではなかったか。近代（モダン）の一要素である国民国家の形成過程で、陳衡哲と任鴻雋は実は微妙な位置にあることを示すものではないか。二人が北京を去ったあとの５月に、胡適らと『独立評論』を創刊し、様々な意見を吐くのは二人が北京を去った後の５月である。そして、1937年に陳衡哲、任鴻雋は連名で「大学教育への提言」(58)を行い、大学改革の必要を説いている。この中で二人は今日の中国の大学教育は失敗である、と言い切っている。

ここで一つ注意しておきたいのが、何炳松が「本書の文字が流暢且つ優雅で生き生きとしていることについては、これ以上文学作品を賛美する言葉で『西洋史』を賛美する必要はないだろう」と軽くふれるにとどめている『西洋史』の表現である。

何炳松はこの書評を書く二年前に、1920年から22年まで北京大学史学系で中古欧州史を担当していたが、J. H. ロビンソンの『西部欧州史』を編訳して講義録とし、1924年あたりに出版している。この『中古欧洲史』(59)は文言文である。また、何炳松が先の書評で挙げたいわゆる「外国の紹介書や「西洋史」、それらもすべて文言文である。

これに対し陳衡哲の『西洋史』は文言的表現が多少混ざるにしても、ほぼ白話体である。興味深いのは、この「白話体」という今の目からすると新旧を分ける明らかな特徴と思われる点が当時は特に取り立てて新たな試みとして取り上げられていないことである。内容、叙述の文学的要素としての特徴は誰もが言いながら、胡適以外は「白話文体」について言及しているようには見えない。当時「文言」と「白話」が混在する中で、それぞれの文体で示される記号は実は緩やかな変化の過程にあり、それほど取り立てて提議すべきものとしてとらえ

られていなかったかも知れない。或いは1920年時点で、教育部がすでに小中学校の教科書は白話文で、という通達しを出していたことから、なかば当たり前のこととして受け止められたのか。

その辺の情況はもう少し丁寧な状況分析が必要とされるが、注目したいのは、こういった語りかけの文体は、これを使う教師によって、言葉のリズム、ストレス、等によって如何様にも面白く語りうる、特徴ある活きた教科書となりうるという点である。更に言えば、場合によっては、エピソードはそれぞれの地方の方言も入れて話しうるということだ。

例えば新大陸をめぐるスペインとポルトガルの争いについて以下のような絶妙な記述がある。

> この両国〔訳者注　スペイン、ポルトガルのこと〕の新大陸への興味は日増しに強まっていった。不幸なことに、地球は球体である。彼ら二人の一方が東に、もう一方が西へ休みなく歩み続ければ、いずれはドシンと衝突せざるを得ない。こうして両国は小競り合いを始めた。そこで例の調停役に長けた教皇がうまい方法を思いついた。地球を真二つに分け、西をスペインに、東をポルトガルに与えることにしたのである。だがこんな紙面上の空論が双方の軍人たちの肉弾戦を止めることなど出来るだろうか。そしてまた双方の利益の衝突を消滅させることなどできるだろうか。1850年スペイン王フェリペ二世がポルトガルを併合するまでこの二つの国の争いは続いたのである。その後、1640年に両国が分裂した時、彼らの植民地事業は没落の一途をたどる。というのはヨーロッパの新興国オランダが、背後から彼らに追いついたからである。（第三編近世史　第五章「地理上的大発見及植民地的競争」）

そして、この植民地争奪戦にオランダが参入し.三つ巴の争奪戦になったことを、端的に生き生きと描いて原因と結果を語る：

> オランダの植民の目的は純粋に経済的なものである。15世紀から16世紀にかけて、オランダが独立を求めてスペインに戦いを挑んでいたとき、当時のフェリペ２世が、ポルトガル王を兼ねていたことを利用してポルトガルの海岸を閉鎖し、オランダ商戦が通過したり停泊したりすることを禁じたことを思い出そう。オランダは商業立国であるから、この致命傷への救済方法を講じないわけがあろうか。フェリペの抑圧政策が逆にオランダの植民事業を刺激しオランダの勢力を南洋諸島にあまねく広げたのである。この時には東方のポルトガル人の一部はすでに欲に目がくらみ、役立たずになっていた。オランダ人の方は異国で仇討ちの心持ちで、その商業手段を利用し、東西インド会社 The East and West Indian Companies」を組織した。この二つの会社は政治的な性格も兼ねており、宣戦布告と講和の全権を持ち、その背後には毎年祖国から派遣される艦隊が控えていた。こうしてオランダは二つの拳を振るい、東への一撃でポルトガルをたたきのめし、西への一撃でスペインを打ち負かしたのである。17世紀になると、オランダはポルトガルに代わって南洋諸島の主人になっていた。台湾の主人になるのもこの時期――1624-1662年――のことである。（第三編近世史第五章「地理上的大発見及植民地的競争」）

最後は台湾への言及でしめて中国との関係を思い出させる。思わず引き込まれる、まるで講談を聞いているようなうまい語りである。この「三国の舞台で演じられる活劇」の様は、教壇に立った教員がもしよき語り手であるならば、この歴史の舞台に学生を引き入れることは容易であろう。歴史教師として真骨頂が発揮できるくだりといってもいい。

こういった文体は、講演に適した表現であるとも言える。以前論じたように、演説から口語体へのヒントを得た経験がこういった文体をつくりあげたともいえる。胡適もその絶妙なる話術で、講義ノートを読み上げるだけの授業にはボイコットで臨む血気盛んな北京大学の学

生から大いなる人気を得ている[60]のだが、胡適がそれほどには敏感に取り上げなかった[61]という言葉の音、リズム、強弱といった聴覚に関係する領域に陳の叙述は気づかせる性質をもつ。言葉というものが書かれた文字だけでなく、それを発音する時の音イメージの総体であり、五感に注意を払うことの大切さを教育の場から提言しているように思えるのである。これまで見てきたように、陳衡哲は音に敏感であったと言える。少なくとも彼女は聴覚領域にも視野を広げている[62]。

胡適と一緒にして論じられがちな、任鴻雋、そして特に陳衡哲の場合は、必ずしも書かれた文字のみに留まらない、総体としての言葉の性質に敏感であった。これについては以前の論述で言及したが、この『西洋史』の滑らかな白話文からも聴覚領域を含めた言語を総体として捉えようとする方向性を感じるのである。

そして、これをもう一歩進めて考えた場合に問題になるのが、近代化を推し進める一つの局面として、言語改革が究極的には国語の確立、という統一、統制の方向に進み、陳衡哲が強調する、個、個性、バラエティ差異の抑圧にやがては行き着くという矛盾である。

歴史教育の場での齟齬は、統一した国民国家へ向けての努力が為される中で、『西洋史』の「白話文」の「可読性」は統一との方向性と不協和音を奏でている。民国期の教育の近代化の過程で見られた一つの可能性としてその内実を丁寧に見ることは今後必要ではないかと思う。

陳衡哲が近代国家建設の中で一体どのような役割を担ったのか、それがまた口語運動の成立にどのような影響があったのか、或いはなかったのか、彼女の文学史上での存在位置はどこにおいたらいいのか等々、この「個」と「全体」をめぐる問題は、彼女の著述のスタイル、ジャンルに微妙に反映されていくように思われる。陳の文体は、近代化の可能性を見るのに有効な問題提起をしている。それにはまずは

1930年代、彼女の教育者としての発言が物議を醸した四川騒動やその後の盛んな時事評論を少し丁寧に見ていく必要があるだろう。

現段階で言えるのは、「国際主義」「平和主義」を標榜する陳衡哲は、少なくとも一面的な見方をしない、バランス感覚はあるということだ。

例えば、新大陸の発見の結果、ヨーロッパ文化が普及したことについて言及する際、決して単純に肯定していない。

> (新大陸発見の)第四の結果は欧州文化の全世界への波及である。それは海潮のごとく、壮麗な波濤とそして汚れた物質も含みつつ、高い山も低い他もものともせず、全世界の津々浦々全てを浸食する。その壮麗な要素は浸食した地に多くの美しい外観を与えた。けれども同時に汚れた要素もまた浸食した地を腐敗腐乱させ、これまで以上に醜いものにした。(第三編近世史第五章「地理上的大発見及植民地的競争」)

彼女は、ヨーロッパ文化の影響下に生活している[63]と近代の側面を強調しつつ、こういったルネッサンスに端を発する「近代化」について全面賛成ではない。プラス、マイナスの両者から公平に見ようとする。

では近代の負の面をどこまで長い射程でとらえているか。今日的な視線から言えば、経済的要因に深い分析を加えないこと等、限界はある。彼女が依って立つ「国際主義」[64]は理論面から言えば単純化のそしりは免れない。また英文での自伝を書いて以降、時事問題にさかんに発言するようになる1930年代、40年代は、その「白話」が流暢になるにつれて紋切り型の言いぐさになっていく傾向があるといった問題がある。それでも、「感性的思惟」ともいうべき感覚の鋭さ、イメージの喚起能力とそれを使っての問題の所在の提示には、「文学のことば」の力を考えるとき、やはり注目すべき何かがあるように思うのである。

## 7　今後の課題

まず、『西洋史』の目的は「序」が示すように、高校生への啓蒙書であり、教科書という性格からいってもそこでの文体が「内面の独白調」になることはない。

自らの考えの基にストーリーを作り、寓話の形式を取ったり、比喩を多用しイメージを喚起し、語りかけるように記述して読み手の興味を喚起する。教育に携わる者として、まず言葉はそのような使い方をされるものだった。わかりやすいスタイルは、留学時代からの英語―中国語の言語変換の経験をもとに演説のスタイルを取り入れたことから次第に形成されたとも言える。つまり陳衡哲の文体は、「声」を全く度外視した書き言葉から直接出てきたものではない。教科書として、五四運動期の他の研究者の著作と比較して見たときに、彼女の『西洋史』や『文芸復興史』がかなり特徴的な文体であったかがわかる。例えば、事実を忠実にならべ、ストーリーを作る事を自重する何炳松の西洋史と比べてみればその違いがかなり鮮明である(65)。これを女性の特有の語りといってしまっては誤解を招くが、高尚さではなく卑近さが目指されたことは注目してよい。

わかりやすさを目指しての比喩の多用は、また逆説的に解釈の多様性を許すものである。そこに、自分で考えさせるという意図があったのだろうが、言葉を変えれば、読みの可能性を広げる性格を持つだろう。

では陳の文体を白話文学史の流れから見たらどう位置づけられるのだろうか。

最初に述べたように、彼女の散文体には、観察の対象を自分の内側に向け、形容詞に心情を託し、言葉に引きずられるままに虚構のイメージに身を任せ感傷に酔う、といった要素はない。そこには外側の「現実」の分析を重視し、目の前の対象を分節化して腑分けを行うの

が科学的な態度であるという確信と、こういった態度に反する曖昧な「非科学的」態度をとることへの警戒がある。

しかしだからといって彼女の小説に登場人物を取り巻く環境の「客観的」な描写、「風景」の描写があるかといえば、それはない。ごく簡単な状況設定の説明の後はストーリーがほぼ会話体で進行している。叙述部分に「客観的」に何かを描写する場面は設けられていないのである。

いったい伝統的なスタイルから新たな文体への変化の様相を見る際にひとつの指標となるのが登場人物を巡る物理的な環境の描写、そして視点を内面に移行させての「心象風景」の描写の有無、描写の為され方である(66)のだが、陳衡哲の創作にはそもそも「風景」の描写はない。

その文体から窺われるのは、彼女の創作が、単語或いは叙事のレベルでの引っかかりを一つ一つ検証しながら、あたかも「自然な」口調のように造っていく作業の途中であり、「自然に語られた」かのように自在に「内」と「外」を行き来させる前の段階であるということである。『西洋史』や『文芸復興小史』と前後して書かれた創作では、思いのままに、というほどには現代中国語を変化させ得ていないといえる。

それでは陳衡哲は、情に任せて思いのままを綴ることはなかったのか。

繰り返すが、彼女は、小説では、内面なるものを描写して心情を吐露するといったことをしていない。白話体の小説を、感情を吐露する表現手段としなかったわけである。現段階でわかっているのは、彼女は1931年９月に発表した「老柏與薔薇」(67)を最後に創作から、時評、随筆、評伝へと執筆対象を移していること、そして、創作活動に於いて文体の冒険を行って「内面」描写へと進むことはしなかったということだ。理由としては、まずは気質そして時代性があるだろう。感情をコントロールして理性の目を曇らせない、これは後の楊絳に通じる

知識人の姿勢であるが、文体を支えるこの姿勢よって、したたか且つしなやかな精神を保持し続け、それにより、目の病を理由にすることが出来たにしろ、文革の迫害を生き抜いたわけではある。

文学創作としては、中国の統一国家が目指される過程で、統一した中国の一国民としての均一化へのベクトルと、その中にあって、差異を認めそれを言葉として表出しようとする営為の矛盾が一つの文学作品となって表れる、即ち「内面」の表出に真実を取り込むモダニズムが言語表出としてそれなりに成熟するのは、林徽因等を待ってはじめて出てくるともいえる(68)。

今後の課題だが、例えば陳衡哲と林徽因の言語表出の違いは、或いは、英語にふれた時期の違いからも来るのではないか、という問いが立てられるかもしれない。媒介として自在に使える言語を成長過程のどの時点で身につけたか、ということによって、思惟形態が違ってくるのではないかということだ。それを考える際には、教会学校で少女時代から英語その他の外国語を厳しく訓練された少女たちの一部が後に作家となり、中国現代文学の一つの流れを造っていったことには注意すべきだろう。今後、女子教育における教会学校の役割を視野に入れながら慎重に見ていく必要がある。

また陳衡哲の小説が、中国社会の現状認識、対象を形象化する際の技巧的な層の厚さ、所謂小説の深みでは「狂人日記」にかなわないことは認めてもいいだろうが、この差、違いは何に由来するのか、と考えてみることも無駄ではない。

例えば近代文化の輸入にしても、日本語及び日本文学経由と英語直輸入ではやはり違いが出るだろう。同じ欧米コンプレックスを持つアジア（日本）の問題から中国の問題をより鮮明に感じ取った魯迅や周作人に比して、近代文学、表現形式を欧米から直輸入で受け止めた欧米留学組は、屈折した劣等感をそれほど感じずに、楽観主義と或る種の優越感で近代化の道を突き進んだとは割合に受け入れやすい推論かもしれない。しかし、欧米的な「個人思想」に近づくほどに、植民地

化の危機の前に統一に向けての動きとの齟齬が生じてくるはずである。

屈折の様相、バイアスのかかり方を見ることがアジア文化共同体を構築する契機となる可能性とみる見方も出来るかも知れないが、欧米文化直輸入の流れとの相克、或いは融合といったことを個別にみる必要はあるだろう

また欧米直輸入といっても、彼女は主流となって世界を覆う欧米文化への批判の視点は十分に持っている。それは留米体験により「彼の地」を直接体験しているために、余計なあこがれがないことからきているのか、あるいは四川地域での体験によって、上海や福建といった沿岸地域の、早くから宣教師達と接し、欧米文化に慣れた「女子学生」たちより批判的な視点を保つことができたということだろうか。いずれにしろ、新旧東西の文化が入れ乱れた時期、そこに身を置いた知識人それぞれの状況を、媒介としての言語それぞれの有り様、相互の影響関係などにもう少し注意を払いながらみる必要がある。

例えば、陳衡哲夫婦と相性のよかった楊絳夫婦にも共通する「国際主義」の傾向が、国民国家成立に向けて求心的な流れが起きた1930年代にどのように変わっていったか、或いは変わらなかったのか。その際の英語は思想の枠組みに根源的な影響を与える役割を果たしたのか。そして「生む性」として、育児にかかわり、盛んに女性の問題にコミットしていった陳衡哲が、共通語、そして共産党政権下のもとで支配的になる表現方法の抑圧の中で、どこまで彼女独自の言葉を保っていられたのか。全体に押し殺されない「個」を保持しえたのか等々、興味深い課題はいろいろと出てくる。一つの手がかりとして『独立評論』で盛んに社会問題を論じていた時期に英文で書いた陳の自伝及び、「文言」から「白話」へ文字表現が移行する時期の英語の役割に注目してみたいと思っている。

## 注

（1）初出は『努力週報』（副刊第10期）1923年6月10日。但しタイトル

は「研究歴史應具的常識」（録近作西洋史大綱的導言）。

（2）「『彼女たち』の近代・『彼女たち』のことば――その2　陳衡哲（2）」『慶應義塾大学日吉紀要　中国研究』第4号、2011年3月、1頁-24頁。

（3）呉福輝主編『中国現代文学編年史――以文学広告為中心（1928-1937）』北京大学出版社、2013年5月、12頁-16頁。尚この資料は種村和史氏よりご指摘いただいた。

（4）単行本『雨点』は上海新月出版社より1928年4月刊行。「一日」の初出は『留美学生季報』第4巻第2号、1917年3月。

（5）注（1）陳衡哲前掲書。

（6）史建国「関与陳衡哲的幾点史料辨証」『民国檔案』2010年2月、137頁-139頁。史建国「『陳衡哲年表』正誤」『魯迅研究月刊』2013年第2期。

（7）中里見敬「中国語の間接話法について」『東アジア文化交渉研究』別冊第7号（2011年3月、123頁-139頁）。「文体としての風景」『言語文化論究 No. 29』2012年10月、69頁-89頁、等等。

（8）Chen Nan-hua, *Autobiography of a Chinese Young Girl*, Peiping, China: September 1935.

（9）坂井洋史『超越と逸脱』（汲古書院、2011年）より借用。

（10）①初版は1924年1月。上海商務印書館より刊行。正式の書名は『新学制高級中学教科書　西洋史』。筆者は北京大学の図書館で所蔵されている上冊（もと燕京大学図書館蔵）の一部を許可を得てコピーした。この教科書は繁体字縦書きで、奥付に「『新学制高級中学教科書　西洋史二冊』上冊、上海、商務印書館1924年1月」とある。

章立ては、陳衡哲が「第6版」の「序」で述べているように、第6版以降の修訂版とかなり異なっている。2007年の東方出版社版（以下「東方」版）、中国工人出版社版（以下「工人」版）とは図表の異同がかなりあると思われる。原本では地図は全部で17箇所に挿入されているはずだが、2007年の「東方」版、「工人」版ともに地図や図版を差し替えているため、詳細は確認できていない。「東方」版、「工人」版は現代中国語の規範に合わせて標点符号も整理してある。「導言」に異同はない。

尚、北京大学所蔵の初版本（上冊）は裏表紙見返しに返却期日の印があり、それによると1937年1月4日から1953年12月23日までの

16年間で少なくとも40回借り出されており、比較的よく読まれていたことがわかる。以下は最近刊行されたものである。

②陳衡哲『西洋史』遼寧教育出版社、1998年。入手できず未見。

陳衡哲著『西洋史　History of THE WEST』(民国学術経典　西洋史系列)東方出版社、2007年。編集「後記」に「西洋史は最初に商務印書館によって上冊が1924年、下冊が1928年に刊行されて以来、1949年までに九刷の刊行があった。最近の版本は遼寧教育出版社より1988年に再版されたもの。「原書の不鮮明さと現在の技術面での困難さから、原書の地図、図及び図の目録を削除したが、内容に関しては原書通り」ということが述べられている。歴史人物、それにまつわるエピソード、地形風景などの図版と固有名詞の現代翻訳ごとの対照表が付け加えられている。図版とその説明は再版の際に差し替えたものであるという。今日の読者への配慮であるが、資料として使おうとする場合、原書と異なる図版が多用されているため印象がかなり違って見える。

③陳衡哲著『西洋史』(大衆歴史経典館、挿図珍蔵本)中国工人出版社、2007年。

表紙の見返しに陳衡哲の略歴紹介とともに、「本書は原名が『新学制高級中学教科書・西洋史』、1924年、1926年に続いて刊行、何度も刊行されて大きな影響を与えた」と紹介されている。表紙には、「巨匠が人々のために著した経典となる読み物」“大師給大衆的経典読物”と紹介の文言がある。魯迅研究者である孫郁の推薦文、付録として胡適が『現代評論』(1926年７月27日)に掲載した書評「介紹幾部新出的史学書」の陳衡哲の該当書に関する部分と、陳衡哲の散文「我幼時求學的經過――記念我的舅父莊思緘先生――」(『宇宙風』(第56期、289頁-294頁、1937年)が載せてある。今回は、この版本を使用した。

④その他、湖南教育出版社(2009年11月)、大百科出版社(2011年９月)から刊行されているが未見。

(11) 現在のところ目にした論文は以下の二点である。

山田敬三「陳衡哲小論・関連資料――五四文学の寄贈作家群」『未名』第六号、1986年10月。

羽田朝子「ノラの憂鬱『ロチスの問題を巡って』」『叙説』(奈良女子大学日本アジア言語文化学会、第38号、2011年３月、299頁-314頁。

作品翻訳としては以下の三点がある。
「鳥」(『新青年』第6巻第5号、1919年5月)が「支那の新口語詩」
『日華公論6-4』(日華公論社、天津、1911年11月)に、「老柏與薔薇」(『北斗』創刊号、1931年9月)が土井彦一郎注訳『西湖の夜——白話文学二十講——』(白水社、1939年)に、また太平洋問題調査会(I.P.R)の支那支部が陳衡哲に編集を頼んで刊行した*Symposium on Chinese Culture*所収の"Summary of China's Cultural Problems"が「支那文化問題の要約」として『支那文化論叢』(石田幹之助監訳、生活社、1942年)の最後に収録されている。

(12) 陳衡哲自身は学校名を明言していないが史建国(注(5)前掲書)が考証している。

(13)「太平洋学界報告」注(10)参照。また「対於太平洋国交討論会的感想」『新紀元周報』(第1巻第39期、16頁-20頁)それぞれ、第2回大会が1927年、第3回が1929年、第4回が1931年(この時は日本側に抗議している)、第5回大会が1933年に開催。陳衡哲任鴻雋夫婦は第2回目から出席。(『任鴻雋陳衡哲家書』注(15)参照)。また第3回会議での日本人女性の地位について等感想を述べている。「対於太平洋国交討論会的感想」『新紀元周報』(第1巻第39期、16頁-20頁)。

(14) 馮進訳、安徽教育出版社、2006年。原著は注(7)前掲書。
尚、史建国「≪陳衡哲年表≫正誤」(注5前掲)で中国語版の誤りが幾つか指摘されている。私は英語のオリジナル版をめぐる考察は興味深い視点を提供すると考えている。

(15)『任鴻雋　陳衡哲家書』搶救民間家書項目組委会編、商務印書館、2007年7月。

(16) 陳衡哲「自伝」『出版界』(第2巻第1期、1945年、1頁-3頁)等より。
この「自伝」は『婦女新運』(1945年第7巻第9期)にも転載されている。

(17) 陳平原「那些让人永遠感懐的風雅——任鴻雋、陳衡哲以及"我的朋友胡適之"」『書城』2007年4月。

(18) 王雲五(1888-1979)。本名は王之端。広東省香山県の人。上海生まれ。雲五は字。号は岫廬。1920年代から1930年代にかけて商務印書館の総経理をつとめ、『萬有文庫』等叢書の編集、四角号碼検索法

の発明など、民国期の出版界、文化会に多大な影響力を持った。1948年国民政府財政部長を務め、1949年台湾に渡り、中華民国行政院設計委員、台湾商務印書館理事長等を歴任。

(19) 陳衡哲「六版序」注（5）③前掲書1頁。尚、王有朋主篇『中国近代中小学教科書総目』（上海辞書出版社、2009年、580頁）によると、陳衡哲著『新学制高級中学教科書西洋史』の出版情況は以下の通りである。

上冊は民国13年1月初版、民国13年7月第2版、民国15年6月第4版、民国15年11月第5版、民国17年11月第6版、民国18年11月第7版、民国20年7月第11版、民国21年6月上海事変（“国難”）後1版、民国21年10月上海事変後8版。

下冊は民国15年2月初版、民国15年6月第2版、民国16年3月第3版、民国18年5月第4版、民国21年6月上海事変後2版、民国21年10月上海事変後6版

この目録を見た限り、1930年前に刊行された「外国史」の中、高校教科書の中で最も再版回数が多い。

(20) 陳衡哲著『文藝復興小史』（百科小叢書第一百零七種）商務印書館、1926年1月。

上述の改訂版である『欧洲文藝復興小史』（萬有文庫第一集一千種　王雲五主編、商務印書館）の奥付に「1930年4月初版、中華民国23年7月再版」とある。黄蕾「陳衡哲史学成就論略」（『安慶師範学院学報　社会科学版』第25巻第5期、2006年9月）によると、歴史地理学者の侯仁之（1911-2013）が若い頃最も影響を受けた三冊の書物の一冊が『文藝復興小史』であり、また歴史学者の楊寛（1914-2005）が蘇州中学師範課の呂叔湘のクラスで用いた教科書が陳衡哲の『西洋史』だったという。

(21) 胡適「介紹幾部新出的史学書」注（9）③前掲書。

(22) 歴史学者、中華民国外交官。(1895-1965)。字は章綬、筆名が清泉。1912年渡米。オーベリンカレッジ卒。米国コロンビア大学大学院で歴史学を学ぶ。哲学博士号取得。帰国後1923年南開大学歴史学部教授、1929年、清華大学大学教授、歴史系主任就任。外交史を中心とする近代史研究に従事。のち外交家として蒋介石政権のもとで活躍。1965年、ニューヨークで死去。自ら近代外国史を編集した『近代中国外交史史料輯要』ほか、著書に『蒋廷黻回想録』等。うち1938年

刊行の『中国近代史』は佐藤公彦氏による翻訳が刊行され（『中国近代史』東京外国語大学出版会、2012年）、訳者による詳細な紹介が附されている。

（23）蒋廷黻「評陳衡哲的西洋史」『京報副刊』第29期、1925年。

また李宗武（1895-1968）も「陳衡哲女士的西洋史」『語絲』（第111期、1926年）で「精緻な筆致（“玲瓏的筆致”）で簡潔に（“提綱絜〔ママ〕領地”）重要な史実を書き出しており、中国語（“漢字”）の西洋史の中で、この一冊は確かにかなり満足のいくものであると言える」としている。ただし、アメリカ史及び二月革命以降の欧州史、第一次世界大戦以降についての記述がないことへの不満を挙げ、下冊が拙速だと批判している。尚瞿秋白とともにソ連に派遣され、1938年に蘭州の飛行機事故で死亡した李宗武（記者、国民党高級通訳官）は別人。

（24）陳衡哲は『西洋史』では具体的に参考書を挙げていないが、以下、北京大学の『北京大学日刊』で学生に指定した参考書、シカゴ大学提出の修士論文附の参考より、一部がわかる。以下『北京大学日刊』では、1920年の年10月６日と７日に参考書の掲示を出した後、同じく、10月11日付け（712期）の掲示で以下のように整理補足したものを掲げている。

1. Robinson and Beard: The Development of Modern Europe 2 vols
2. Robinson and Beard: Readings in Modern Europe History 2 vols
3. Hazen: Europe Since 1815
4. Haves: A Political and Social History of Modern Europe 2 vols
5. Mathews, Shailer: The French Revolution
6. Some biography of Napoleon, such as Fisher’s Napoleon, Bourne’s Fournier’s Life of Napoleon The first; etc.
7. Bourne: The Revolutionary Period in Europe
8. Dow: Atlas of European History

最後に「以上は欧州戦争以前の歴史である。欧州戦争とその後についての史書についてはのちにまた指摘する　民国９年10月５日」と署名と共に記されている。

同じく、1920年10月21日付け（722期）の掲示では、（「歴史研究家中欧交渉史的参考書10種、本課第四閲覧室に閲覧用として配架」と但し書きされ更に以下のように整理補足されている。

1. Beke, C. T. ---Three Voyages by the North East. 922 B1
2. Douglas, R. K. ----Europe and the Far East, 920 D1
3. Boulger, D. C.----- Central Asian Questions. 922 B2
4. Menoloza's Historie of China. Qvols. 931 M1. 1, M1. 2
5. Markhan, C. R. ----Embassy to the Court of Timour A. D. 1403-6. 922 M1
6. Rockhill, Wm. W. ---- The Journey of Friar William of Rnbrnek. 922 R1
7. Bashford, J. W.---- China, an Interpretation. 910 B2
8. Marvin --- The living Past. 910 M7
9. Tylor ----Primitive Culture. 910 T1. 1, T1. 2
10. Harrison, F.--- The Meaning of History 900 H1

最後に「还有别的书以后再随时登出　民国九年十月二十日」と署名と共に記されている。

陳衡哲の修士論文はシカゴ大学が所蔵。題名は "The Intercourse between China and the West in Ancient and Medieval Times (223. B.C-1367A.D.)" May,1920.

参考資料として挙げてあるものには例えば以下のようなものがある。

Chau Ju-kua, *the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth Centuries.*

Hirth, F., *The Story of Chang Kien (Chang Chien), China`s pioneer in western Asia.*

Frazer, J. G., *Pausanius description of Greece. Six volumes. Vol 4*

Marco Polo, *Travels.*

Schoff, W. H., *The Periplus of the Erythreacean Sea.*

Stiffe, A. W., *Ancient Trading Centers of the Persian Gulf*

Yule, Sir Henry., *Cathay and the Way Thither. Revised by H. Cordier.*

Bell, M. S., *The Great Central Asian Route from Peking to Kashgaria.*

Bevan, E. R., *The House of the Seleuses. Two volumes. Vol. 1.*

Gibbon, E., *The History of the Decline and Fall of the Roman*

*Empire*.
Lyall, Sir Alfred., *The Rise of British Dominion in India*.
Rawlinson, H. G., *Intercourse between India and the Western World: from the earliest Times to The Fall of Rome*.

尚、これとは別に『史地学報』1922年第1巻第4期に「中等学校西洋史参考書目」として米国シカゴ大学教授 R. M. Tryon（1875–1954）が *Historical Outlook*（April, 1922）に発表した中等教育歴史教員のための参考書目が紹介されている。その筆頭に Robinson, J. H. の *The New History* が挙がっている。ただし数十冊にのぼる原書（英語）が当時の中等教育、或いは高等教育でどれだけ活用されたのか、学生、或いは教員の英語のレベルがどれほどだったのか不明な点が多い。民国成立前後から1930年代にかけての日本留学情況似ついての研究は多数あるが、欧米留学の情況、留学生たちのその後の情況などはまだ不明な点が多い。今後探求すべき分野であろう。

(25)「到了四百七十六年，日耳曼的一個領袖，叫做俄陶開，便把那個久為外人傀儡的羅馬皇帝羅木拉，輕輕的推下了他的皇帝位，他自己久做了羅馬的主人。西羅馬帝國的軀殼，至此也久跟著他的久死的靈魂歸天去了!」

(26)「西洋史『原序』“要使真理與興味同時実現於読書人的心中”」。

(27)「這幾句話把西羅馬帝國滅亡的事實和精神完全形容出來：其效率遠勝於普通教科書的幾十頁」。

(28)「但此書對於種族特性的信仰未免過重。所謂愛琴人及希臘人美術的天才和羅馬人政治的天才何以見得不是環境使然，經驗使然？依「天」的解釋，別的科學早已不自降利用了。史家若還不覺得玄空，若永久延用這種似解釋非解釋的方法，史學當然不能成為科學。與其說是天才，不若說我不知道」。（本書は種族の特徴に対する信仰が重すぎる嫌いがある。いわゆるエーゲ人及びギリシャ人の美術の天分とかローマ人の政治的天分とかいうものは環境や経験から来るものではないのか。「天」に基づく解釈は、別の科学ではとっくにしなくなっている。歴史家が衒学と自覚せず、永遠にこういった解釈のようで解釈でない方法を使い続けるならば、もちろん史学は科学とはなり得ない。「天分」という言葉で解釈するよりは、わからない、と言ったほうがよい。）

(29) 陳楽民「陳衡哲和她的『西洋史』」『南方周末』、2008年6月12日公表（http://infzm.com/content/13231）

例えば、他の論者もよく引く箇所であるが、陳楽民は、陳衡哲が『西洋史』下冊の第一章「近世史」の最初に配した「文藝復興」で清末の詩人龔自珍の詩を引用した以下の箇所を引く。

> “落红不是无情物，化作春泥更护花”，上古末年，西罗马帝国既遭蛮族的蹂躏，而罗马的文化，却并不曾以此忘其天职，结果是中古末年古文化的大复活。意大利的文艺复兴，又何尝是无情之物呢？它虽受了外来武力的摧残，化为泥土，但它却不曾因此绝了希望。这泥土怀着文化的种子，却跟着它的摧残者，走入了西欧各土，后来便那里发芽展叶起来，为近代产生一个灿烂的文化。
>
> （「落紅これ無情の物ならず、化して春泥となり更に花を守る」、上古末、西ローマ帝国は蛮族の蹂躙にあったが、ローマの文化はそれによって職分を忘れることはなく結果中世の末年に古代の文化が第復活した。イタリアの文藝復興も無情のものなどとは言えない。外来の武力により破壊され泥土と化したが、そのために希望を失うことはなかった。この泥土は文化の主旨を孕み、その破壊者について西欧の各土壌に入り込み、後にその地で芽を出し派を広げ、近代の煌めく文化を生みだしたのである。）

陳衡哲は、文言文の含意を白話の説明的、分析的な文体に融合させるのがうまい。尚「春泥」については、陳衡哲と親交のあった楊絳が評論集『春泥集』の題名に用いている。

(30) 何成剛「従訳介、改編到自編：民国歴史教科書的発展歴程」『歴史教学問題』2007年第5期。何成剛、張安利「一部“帯有創作的野心的”歴史教科書——陳衡哲著述『西洋史』教科書特色述評」『中学歴史教学参考』2004年11月、張国義「試論民国時期中学歴史教科書的特点及啓示」『歴史教学問題』2008年第1期等。

(31) 何炳松（1890–1946）、字は柏丞、浙江金華の人。歴史学者、教育家。1912年官費留学生として米国留学、カリフォルニアバークレー校、ウィスコンシン大学、プリンストン大学で、政治、経済、歴史、等を学ぶ。蔡元培の招聘で北京大学史学系教授となり、Robinson の *The New History* を『新史学』として翻訳編集。西欧の歴史学の理

論と方法をはじめて系統的に中国に紹介。梁啓超から「中国新史学派の指導者“中國新史派的領袖”」と称される。浙江省立第一師範学校、武昌師範大学、国立暨南大学の校長を歴任。著書に『歴史研究法』『歴史教育法』『西洋史学史』『秦始皇帝』等、ほか、中等、高等教育歴史教科書を編纂。なお1919年から1920年にかけて『北京大学日刊』に「西洋史教授法之研究」（編訳）を連載している。

(32)「陳衡哲之高中西洋史」『申報：教育與人生週刊』1924年第２巻第51期、4頁-6頁。

(33) 石鴎、呉小鴎編著『百年中国教科書図説1897-1949』湖南教育出版社、2009年、162頁。

(34) 梁啓超と「新史学」の関係について、最近の論文では、李勇「梁啓超『新史学』与美国新史学」（『史学理論与史学史学刊』2012年総10巻）があり、そこで先行研究として以下の論文を挙げている。徐彬『梁啓超』（『時報』1929年２月26日-28日）、兪旦初「二十世紀初年中国的新史学思潮初考」（『史学史研究』1982年第３、４期、1983年第２期）、蒋俊「梁啓超早期史学思想与浮田和民的史学通論」（《文史哲》1993年第５期）、尚小明「論浮田和民『史学通論』与梁啓超新史学思想的関係」（『史学月刊』2003年第５期）、鄔国義「梁啓超新史学思想探源」（『社会科学』2006年第６期）。このほか侯雲灝「20世紀初“新史学”的産生及其演変」『淮北煤炭師範学院学報（哲学社会科学版）第24巻第５期、2003年10月。李考遷「徳国伯倫漢史学東伝考論」中国社会科学網、2011年５月20日公表（http://www.cssn.cn）等多数。邦文では、石川禎浩「梁啓超と文明の視座」『共同研究梁啓超――西洋近代思想受容と明治日本』（狭間直樹編、みすず書房、1999）、同じく「近代東亜細亜“文明圏”の成立とその共通言語」『西洋近代文明と中華世界』（狭間直樹編、京都大学学術出版会、2000年）。

(35) 向小明『北大史学系早期発展史研究（1899-1937）』北京大学出版社、2010年。

(36) 注（19）前掲『中国近代中小学教科書総目』（573頁-574頁）に原書が日本人編集の「外国史」の教科書として以下が挙がっている。

『万国史綱』元良勇次郎、家永豊吉著、邵希雍訳（上海商務印書館1903年）

『中等西洋史教科書』小川銀次郎編、沙曽治訳（上海文明書局1904

年)。
『中等東洋史』桑原隲蔵原著　周同愈訳著（上海文明書局1904年)。
『中学西洋歴史教科書』坪井九馬三著　呉淵明、仲遙訳述（上海広智書局1908年)。
『東洋史要』桑原隲蔵著　金為訳述（上海商務印書館、1908年）
『西洋歴史教科書』本多浅次郎著　興文社訳（上海群益書社、1912年）

(37) Myer's General History, written by Philip Van Ness Myers, 1889, 黄佐廷口頭訳、張在新筆記、山西大学堂訳書院1905年出版、上海華美書局代印.作家の茅盾は回想「北京大学予科第一類的三年」で英国人教師からこの教科書で授業を受けたと述べている）
(38) 梁啓超「イタリア建国三傑」『新民叢報』1902年６月-12月。
(39)「不幸敷而言中不聴則国亡」所収。
(40) 蒋百里「欧州文藝復興」
(41) James Harvey Robinson（1863-1936）米国イリノイ州生まれ。歴史学者。ペンシルバニア大学（1891-95）コロンビア大学（1895-1919）で歴史を教える。後、同僚のC.A.ビアードとともにニューヨークにthe New School for Social Research（現在ニュースクール大学として）を設立し、教師と学生の活発な討議を通じ、社会問題に積極的に取り組む開かれた大学として進歩的な教育を提唱する。日本での紹介は、*The Mind in the Making*（邦題『新思想の普遍化』猪俣津南雄訳、臥龍閣、1924年)、*Human comedy*（邦題『人間喜劇』大久保康夫訳、三笠書房、1938年)、*The development of Modern Europe*（ビアードとの共著、邦題『近世欧洲発達史』全３巻、中村經一訳、今日の問題社、1942年)。

中村經一は訳者序で次のように紹介している。「ロビンスンはハーヴァード大學と獨逸のフライブルグ大學とで歴史學を選考し、一八九〇年に哲學博士となり、一八九二年からコロンビア大學で歴史學を講じた。ロビンスンはそれまでの歴史記述が主に軍事、政治のみに限られてゐることを否とし、眞の歴史記述は軍事、政治のみならず、社會的、科學的、知的並びに美的方面をも包含せねばならぬと主張した。この主張は北米およびカナダの歴史學界に大きな影響を與へた。彼は歴史前進上における思想の役割を重要視泗、人間を進歩的ならしめて、世界を発展せしめるものは思想であると信じて

いた。ロビンスンの著書は殆どヨーロッパ史に關するもののみであるが、本書は、その中の最も優れたものの一つである。

共著者ビアドはデポウ大學とオックスフォード大學とを卒業し、一九〇四年にコロンビア大學から哲學博士號を受け、其の三年後からコロンビア大學で政治學を講じた。ビアドの歴史書は本書が主なるもので、あとは殆ど政治に關するものに限られてゐる。」

(42)「新史学」は、早くは1902年梁啓超が『新民叢報』創刊号にその名も「新史学」として打ち出して以来、何炳松が言及するように中国の歴史学分野で広く受け入れられた概念である。梁啓超は何炳松にとって北京大学での先輩格に当たる同僚であるから、当然それまでの歴史教育の情況をわかっている。ただし何、陳らが実際西洋史を教えたり、教科書を編集する際は、梁啓超ら日本経由の「新史学」ではなく、自らアメリカで学んだ英語直輸入の概念を使っている。侯雲灝は「20世紀初“新史学”的産生及其演変」でロビンソンも梁啓超も、ドイツのベルンハイム（Ernst Bernheim 1850-1942）の流れを引く同じ系統にあるとし、また李勇「梁啓超『新史学』与美国新史学」（注（33）前掲書）ではより詳細に、梁啓超の「新史学」とロビンソンらのアメリカ「新史学」との関係が論じられている。ただいずれにしろ、媒介となる言語（英語日本語）との関係について詳細な議論はされていない。この点、石川禎浩「近代東亜細亜“文明圏”の成立とその共通言語」（注（33）前掲書）では、梁啓超の「剽窃的、翻案的」な浮田和民紹介による「歪みの共有化」が近代東亜細亜に相互対話可能な“文明圏”を成立させる上で基礎を提供したのではなかっただろうか」と鋭い指摘をしている。筆者は同じようなことが何炳松の「新史学」受容にも起きていたのではないかと考えている。媒介となる言語によって受容のあり方は変わってくるだろう。今後「媒介」により注意を払っての異文化接触における文化翻訳のありようが議論されるべきだろう。

また何炳松はRobinsonと一緒にH・G・ウェルズの名を挙げている。ウェルズの *The Outline of History*（1920）、邦訳『世界史体系』（1947年）等は、梁啓超が息子の梁思成、梁思永等を助けて1920年中国語に翻訳し、1927年商務印書館から刊行されている。韋爾斯『世界史綱』（梁思成等訳述　梁啓超等校訂、商務印書館、1927年）。

(43)「在它开始之时，在欧洲的百人，还在茹毛饮血时代，及至它完结之

时，凡是现代文化的种子，却差不多都已种在地下了；有的还在土中，有的甫见萌芽，有的是已经方苞展叶，灿烂得很好看了。」（第一編上古史　結論部分）

(44)「人類文明之花，却仍旧不停的升放着。」（第一編上古史第二章はじまり部分）

(45) 書評の書かれた前年1923年にアメリカで前国務長官のウイリアム・ジェニングス・ブライアンが巨額の資金を用いてアメリカ各地の大学で反ダーウィニズムの運動を起こしたことにたいし、デューイやロビンソンがそれに反対する宣言文を出したことを挙げ、新学説を広めることの難しさを述べながら、陳衡哲もデューイやロビンソンと同じ立場だとする。しかし、陳が国民国家形成に向けて単純に歴史「進化論」を信奉していたか検討が必要である。陳衡哲、任鴻雋は、周作人とも交友が深く、「近代」ではどちらかと言えば進歩論よりは循環論を取る様に思える。

(46)“我們深言，歴史不是片面的，乃是全体的，選択歴史材料的標准，不単是政治，也不単是経済或宗教，乃是政治，经济，宗教，以及凡百人类活动地综合”（「導言」三　歴史の範囲と史料の選択）。「導言」で示される歴史研究の目的、研究姿勢、範囲と史料選択の基準、史学の進化、時代区分で示される考えは「新史学」の基本的な考え方と合致する。

(47)「陳衡哲女士這本書不是東抄西寫的東西。實在一本精心結構的創作。而且我們讀了這本書以後，總覺得陳女士的眼光是在歷史地上面的，不是四周被歷史圍捆起來，弄得逃來逃去，無路可走的，換句說話，就是陳衡哲女士對於西洋史自很深的研究，而且有一枝流暢地筆在他的手邊，所以他能夠駕駛西洋史，而不是於做西洋史的奴隸。簡括的説，就是他有編著西洋史的完全的資格」。

(48) 以上引用は「近作西洋史序言」を訳したもの。これは『努力週報』第73期（1923年10月７日）掲載。後に『西洋史』「序」にそのまま使われている。

(49) 注（23）参照。また陳衡哲は常に新たな資料、史料を発掘しそれを著述に反映させている。『西洋史』下冊の締めくくりとして、言葉の大切さを述べるので引用した *Queen Victoria*『ヴィクトリア女王伝記』はブルームズベリーグループの主力メンバーである Lytton Strachey（1880–1932）によって1921年に出版されたばかりである。

憶測であるが、友人の徐志摩がこの本を紹介した可能性もある。

(50) 胡適注（21）前掲書。“他的長処在用公平的眼光，用自己的語言，重新叙述西洋的史実。作者的努力至少可以使我們知道西洋史的研究裏儘可以容我們充分運用歴史的想像力与文学的天才来做創作的貢献。”

(51) 羽田論文（注（10）前掲書）は当時の情況をよく拾っているが、胡適への書簡（『胡適遺稿及秘蔵書信』第36冊37頁）は肝心の部分を省略して訳したために、手紙の書き手、陳衡哲が妊娠を恥じて戸惑う女々しい陳衡哲になってしまっている。陳が北京大学の職を辞したのは確かに妊娠と育児が主な原因だが、陳衡哲はもっと正面から受け止めている。それほど妊娠を恥じているわけではない。該当箇所の原文は「请你莫有疑心我完是个「任性」的人。我若「任」我的「性」，北京大学的書我一天也不能教了。这是實话，你不信問叔永」。訳は「どうか私のことをひどくわがままな人間ではないかと疑わないでください。もし私が自分のわがままでそうする（「さが（性）」の「ままにする（“任”）ならば、それなら北京大学の授業は一日だってすることはできません。本当です。信じないなら叔永に聞いてみてください)。羽田訳のように（北京大学の授業が)「本当に嫌なのです」と言っているわけではない。

(52) 陳衡哲は『自伝』（注（８）前掲書）で、父親が購読していた梁啓超の『新民叢書』から大きな影響を受けたことを述べ、梁啓超がその生き生きとした文体によって、英国の立憲運動、フランス革命、イタリア統一運動等々の歴史的事件を物語のように展開したことの意義を語っている、陳自身も梁啓超によるロラン夫人、ジャンヌダルク等の伝記に魅入られたという。

> “*The Magazine for a New People*, through which he tried to modernize China by introducing anything and everything that the magic box of the intellectual West might contain. It is true that many of his writings were merely adaptations or even simply translations from the Japanese, but what did it matter so long as he could make each idea a coherent unit, saturated with his magnetic style? It was in this way that such persons as Cavour and Mazzini, Madame Roland and Kossuth , became known to the intellectual China; and it was in this way that

such stories as England's struggle for constitution, the French Revolution, the Unification of Italy and Germany,became attractive reading material for the Chinese people."(Chapiter ⅴ Influences that shaped the course of my life)

梁啓超の史実の語りについては、松尾洋二「梁啓超と史伝――東アジアにおける近代精神史の本流――」『共同研究　梁啓超』(注(33) 前掲書所収)、が詳細に論じており、陳衡哲の語りを考える上でも参考になる。

(53)『西洋史』六版以降に挿入されている「原序」の最後の段落部分より。なお「原序」はもともと『努力週報』(第73期、1923年10月７日)に「近作西洋史序言」として掲載。

(54)「美国女子的大学教育」『教育雑誌』(第15巻第１期) 1923年。

(55) 注 (22) 前掲「評陳衡哲的西洋史」の冒頭。「陳女士這本書 (新學制、高級中學教科書、西洋史、上卷、陳衡哲編輯、商務印書館發行) 的好處、就是「新史」派的好處。(陳女史の『西洋史』のよい点は、『新史』のよい点である。」)。

(56)「今夏中華教育改進社關於史地教育之提案及歷史教育組地理教学組之会議紀録：議案五“主文”中等以上学校之歴史教授法應廃棄講義「至少須廃棄印成之講義」而用学生自修法。陳衡哲 (提議) 任鴻雋 (附議)」『史地学報』1922年第２巻第１期、13頁-14頁；『新教育』1922年第５巻第３期、201頁-205頁。

(57)『任鴻雋陳衡哲家書』注15前掲書の任鴻雋及び陳衡哲年表参照。

(58)「一個改良大学教育的提議」『現代評論』(第一週年記念増刊号) 1925年９月。任鴻雋との連名。また二人はドルトン制度を採用していた北平芸文中学に長女を一時入学させており、陳衡哲はそこで講演も行っている。『任以都先生訪問記録』(中央研究院近代史研究所、中華民国台北、1993年) 参照。当時アメリカで始まったばかりで個性を伸ばすための個別教育を行うドルトン制度が新文化運動時期に受け入れられ試みが各地で行われたようである。詳細は以下を参照：鄭国民「道爾頓制教育財中国実験的啓示」『北京師範大学学報』(社会科学版) 2003年第３期。

(59) 何炳松著『中古欧洲史』(再版、上海古籍出版社、2012年)。「弁言」として、民国９年から11年に北京大学史学系で中古欧洲史の講義録

として書かれたもので、「ほとんどが、アメリカの著名な歴史家James Harvey Robinsonの著した『西部欧洲史』*An Introduction to the History of Western Europe*」の前半部29章を底本にしており、文明史の部分はRobinsonとBeardが共著の『欧洲史大綱』*Outline of European History*第一巻を補足として用いている」とある。

上海古籍出版社版では最初に陳衡哲の推薦文が「中古欧洲史序」として掲載されている。そこでは陳衡哲は、「その学識を持ってすればご自身で教科書を編集される力が十分にあります。けれどもご自身で編集される著書を完璧にするのは容易ではないとお感じになり、またアメリカの先学ロビンソン氏の史学に感服しておられるために、大変慎み深く、ロビンソン氏の本書を中国語に訳され、国内の学生に供することにされたのです。」と述べている。最後に「(民国)13年9月1日序于南京」と記されている。

(60) 胡適の人気について、注34前掲、尚小明『北大史学系早期発展史研究(1899-1937)』50頁には陳衡哲の簡単な紹介(写真付き)がある。

(61) 村田雄二郎「『文白』の彼方に」『思想』1995年7月。

(62) 例えば、以下のように著名な音楽家とともに学び歌の作詞をしている。
「衛生歌」『医薬学』1926年第3巻第5期、48頁-51頁。
「愛」(陳衡哲作詞　簫友梅作曲)『育楽雑誌』第1巻第1期、1928年、1頁。
「睡得早」(陳衡哲作詞　胡周淑安作曲)『児童教育』第2巻第4期、1930年。
但し陳衡哲がどれだけ音と意味の関係を意識して「白話」を完成させていったのかは検証が必要ではある。

(63)「一百五十年来欧州的国際戦争：為某中学講演的稿子」『浙江青年』第3巻第7期、1937年、1頁-3頁。

(64) 注(63)前掲書及び「両種的話法：対北平芸文中学畢業生的演説」『浙江青年』(第1巻第9期、1935年、112頁-113頁)等。

(65) 例えば何炳松『近世欧洲史』(民国学術文化名著第1輯)湖南省、岳麓書社2011年7月。原本は初版が民国13年1月1日、増訂版に民国19年9月22日付け、増訂六版小序が添えられている。岳麓版は第六版増訂版を使用。北京大学の講義録として使ったもので文言文である。丁寧な取捨選択と、因果関係の導き出しがあるが、高校の教科書として編まれた陳衡哲の西洋史の、思わず引きずり込まれるよ

うな文体ではない。実証を重んずる歴史学者としての誠実さが表れた教科書。数十回再版されており、後の教科書もこれを参考にしているものがかなりある。また耿淡如・王宗武編集『高中外国史』（正中書局、1935年）は出版の経緯として「1932年12月教育部より発布された高級中学外国史課程基準に則って編集された」とあるが、事項の羅列が多く、陳衡哲のような語りはなくなっている。

(66) 現代白話文について、それまでの文言文との違いを視野に入れつつ文体の特徴を論じたものに、中里見論文（注（6）前掲書）のほか、劉禾（Lydia Liu）による以下の著書での老舎と蕭紅についての議論が参考になる。『語際書寫—現代思想史寫作批判綱要』（香港、天地圖書有限会社、1997)、『跨語際実践　文学，民族文化与被訳介的現代性（中国1900-1937)』修訂訳（北京　生活・読書・新知三聯書店、2008年)、これの原書である *TRANCE LINGUAL PRACTICE Literature, National Culture, and Translated Modernity-China, 1900-1937*. Calfornia: Stanford University Press, 1995.

(67) この作品は土井彦一郎による邦訳がある。邦題は「老いたる柏と野薔薇の対對話」『西湖の夜　白話文學二十篇』(白水社、1939年）所収。

(68) 具体的には1934年発表の「九十九度中」を頭に置いている。

## 陳衡哲　著訳目録　　補遺

(「？」は執筆月が不明なことを示す。)

1918. ？　「記新大陸之村中生活」『婦女雑誌』1918年第4巻第3期。：文言文
1920. ？　「巫峡里的一個女子」。
1922. ？　「中欧交通史目録」『史地学報』1922年第1巻第3期。
「基督教在欧州歴史上的位置」『東方雑誌』第19巻第10期；『努力週報』第1期。
「基督教在欧州歴史上的位置（續)」『努力週報』第2期。
12　「綺琴文化」『努力週報』副刊第4期。
1923. 01　「美国女子的大学教育」『教育雑誌』第15巻第1期（執筆は1922年12月)。
11　「彼述克」『晨報五周年紀年増刊』第12期。
1924. 08　「国家教育與国際教育」『教育与人生』第42期。
1925. 12　「歴史教学與人類前途」『晨報七週紀念増刊』第12期。
1926. 03　「衛生歌」『医薬学』第3巻第5期。26. 1
09　「我為什麽贊成愛國中学？」『晨報副鐫』第46期。
1927. 07　“Outstanding Cultural Assets of the Chinese People”
1928. ？　「愛」(陳衡哲作詞・蕭友梅作曲)『音楽雑誌』第1巻第1期。
1929. ？　「対於太平洋国交討論会的感想」『新紀元周報』第1巻第39期。
01　“The Chinese Woman in a Modern World” *Pacific Affaires*, vol. 2. no. 1, pp.

8–15.（署名は Sophia Chen Zen）。
1930. 01 “The Chinese Woman in a Modern World”
? 「睡得早」（陳衡哲作詞・胡周淑安作曲）『児童教育』第 2 巻第 4 期。
1931. 05 “Summary of China’s Cultural Problems: Being the Concluding Chapiter in the Symposium on Chinese Culture”.
1931. 10 “The Good Earth by Pearl Buck” *Pacific Affaires*, vol. 4. no. 10, pp. 914–915.
12 “China’s Changing Culture” *Pacific Affaires*, vol. 4. no. 12, pp. 1070–1081.
1932. 12 “Influences of Foreign Cultures on the Chinese Woman”.
1933. 12 “A Non-Christian Estimation of the Missionary Activities”
1934. 01 *The Chinese Woman and Four Other Essays*, 2nd ed. Peiping.
? LOUISE’S PROBLEM『金陵女子文理学院校刊』（これは「洛綺思的問題」の英訳である。陳本人の訳ではないが、陳が目を通さない可能性は低い。すると「洛綺思」は Louise、つまり「ルイス」と読ませることになる。どう発音するのか検討が必要である）
? 「関與現代婚姻問題的又一解」『国聞周報』第11巻第15期。
1935. ? 「両種的説法：対北平芸文中学畢業生的演説」『浙江青年』第 1 巻第 9 期。
07 「復古與独裁勢力下婦女的立場」『独立評論』第159号。
? 「児童年的感想：（十一）対於児童年的三種的希望」『現代父母』第 3 巻第 6 期。
01 「青年的康健問題」『現実』第 2 巻第2/3期。
06 「心理康健与民族的活力」『健康生活』第 4 巻第 2 期。
09 「健康公論：中学生康健問題」『健康生活』第 5 巻第 4 期。
1936. 05 「成都的春：一封給朋友的公信」『西北風』第 5 期。
09 「南猿與北猿：證明環境與天才的関係」『瀟湘漣漪』第 2 巻第 7 期。
1937. 04 「做官与做事」『海王』第 9 巻第23期。
? 「談青年恋愛修養」『学校新聞』第64期。
1938. ? 「婦女在火場中：婦女問題随筆（續）『宇宙風』第56期。
? 「婦女問題随筆」『宇宙風』第67・68・69・71期。
1943. ? 「特輯：蔡孑民先生的逸事二則」『時代生活』第 1 巻第 2 期。
1944. ? 「社会公道的意義與使命」『雍言』第 4 巻第10期。
? 「我対於従軍青年的到敬與期望」『中外春秋』第 3 巻第 1 期。
1945. ? 「従軍特輯：青年従軍運動的副作用」『西北公路』第 6 巻第4–6期。
? 「関與婦女的希望與憂慮」『書報精華』第 3 期。
? 「創作欲與占有欲」『書報精華』第12期。
? 「是我們自省的時候了；勝利感言之二」『客観』第 5 期。
1947. 01 「乗風好」（詩）『観察』第 2 巻第11期。
04 「採桑子」『観察』第 2 巻第18期。
05 「関與自由思想分子（通信）」『観察』第 2 巻第12期。
? 「我們要的是和平」『観察』第 2 巻第24期。
1948. 04 「中国学生在美国」『浙贛路訊』第241期。
1949. ? 「創造自己的生命：運河與揚子江」『新児童世界』第27期。